

第40回 こうへ市民文芸

詩 部 門

一
席

おじさん

原
田
い
づ
み

ワシはのけへん

こっからのけへん

まばらに焼け残った家のひとつに

おじさんは住んでいた

おじさんと 身寄りのない猫たちと

何年も住んでいた

街の復興計画が進み

家はひとつひとつ消えていった

大きなビルが建つのだそうだ

ワシはのけへん

ここは　ワシのうちや

おじさんの家を残して

広い空き地が出来た

おじさんの家のまわりにはフェンスが張られた
まるでおじさんと猫を閉じ込めるように

おじさんは病気で死んだ

すぐに家もフェンスもなくなった

大きな図書館が出来た

おじさんの家のあたりは駐車場

車のとまっていない広い駐車場

猫はどこへ行ったのだろうか

選評

永 井 ますみ

阪神淡路大震災後三十年経って、今年は色々な報道記事や特別イベントが組まれた。街は復興しなければいけない。復興計画の名の元に、住民を右へやり、左へやりする。動かないおじさんの人生を見ている詩人の視線。フェンスで家を取り囲む行政の酷いやり口に反発する。その跡地には図書館が建ったが、おじさんの命を懸けた跡地は、駐車場でしかなかったのだ。しかも／車のとまっていない広い駐車場／深い空虚感に共鳴する。

いっしょや

後藤 康子

「指の先、曲がってしもうてるなあ」

「髪の毛、綺麗な白髪じゃのうてゴマシオやなあ」

母が穏やかになった

娘の掌を撫で顔をじつと見る

そして自分の掌をさする

ヘバーデン結節の指 くせ毛でゴマシオ髪

ふたりは まったくいっしょ

母99歳 娘75歳

母の施設に毎月通う娘

車いすに乗る母 腰痛をかばう娘

面会室で向かい合う

白いマスクに覆われた顔

しわの刻まれた口元もいっしょやろう
きつと

「ココハウバステヤマヤ」

「コゲンナトコニオリタクネエ」

「イエニカエリテエ」

「ムスメヤツタラワカッテヤ」

三年前 母が壊れた

こうはなりたくない

でも 母ちゃんの娘やからなあ

こうはならんぞ

子どもに迷惑かけとうない

でも

母と娘って同じ道あるくんやろうか

明日電車に乗って
母に会いに行く

選評

永井 ますみ

老人の人口が順調に増えて、九十代って普通になってきている。我が母も九十九歳で亡くなった。(満ではナント一〇二歳だそうだ)三年前「ココハウバステヤマヤ」と叫んで壊れたかに見えたお母さんも、どうやら自身の老化を認め、我が身と同じに老いて来る娘を見て穏やかになつて来られたようだ。さて私はと詩人は考える「母と娘って同じ道があるくんやろうか」壊れてみたり、穏やかになつてみたり。生活語の詩が生きている。

二
席

ブランコを漕ぐ

土居靖子

座り乗り

脚を曲げ伸ばし

ときに地面を蹴り上げ

ときには背中を押されて

勢い増して調子づく

目の前の公園は平和

ママの手の鳴る方よちよち歩きの子

前向きな鳩は規則正しく

ところ狭しペンペン草

今日という今日

あさっての方向へ頭をよぎる

伐採されたヤマモモの木

ドングリ探しまくる熊

パチパチツドド地鳴り

ギラギラ一見しないペテン師

脇目をふってバランスくずす

おとなだつてブランコ

泣きのナミダ乾かして

行く末は天の助け

空を仰いだら

膝を曲げ伸ばし

立ち漕ぎ

動きを止めたらゼロ地点

いかようにも変われるニュートラル

かりそめ舟を漕ぐ

ゆめゆめ油断するな

アラーム音でリセット

腹をくくる

おへそにチカラ
両の手でにぎる鎖
胸いっぱい風

選評

神尾和寿

遠い昔に夢中になってブランコを漕いでいた頃の感触が、蘇ってきた。開放感や爽快感ばかりではない。不安感もちょっぴり、そして、調子に乗りすぎると、ケガをする怖れもある。けれども、その全体がブランコの魅力なのだろう。
豊かな表現力に感心した。風を切りながら、隅々まで世界が眺められている。これからもここで生きていくのだといった決意をもつて、さあ、もうひと漕ぎだ。

秋の蝶

秋の歌がきこえる

私は窓をいっばいに開けた

通りに誰もいなかった

歌声は止んでいた

ランドセルを背負った子がやってきた

やあ 学校へいくの 家に帰るの

彼はつるりとした顔で通り過ぎ

少し先の四つ角を曲がって消えた

つぎにきたのは人ではなく

片岡 晃

アサギマダラの一群だった
そのあとを風が追ってきた
鱗粉が舞い私は目を閉じた

四つ角の手前で風が先頭にてた
蝶たちは右往左往したあげく
鈴懸の樹の根の周りに残らず落ちた
風はそのまま立ち去った

また歌がきこえる
鈴懸のかげからさっきの子が現れた
結んでいた手を開いた
色鮮やかな幼虫が休んでいた

選評

神尾和寿

読んでいて、清々しい気持ちになれた。ロマンチックでありながら、くどくない。甘すぎず、口溶けの良いチョコレートのような味わいだ。「歌声」や「風」までも含めて、登場するさまざまなものに、感情移入することができた。

物語風の作品だが、展開が明確だ。そうして、最終行のカタルシスへと自然に導かれる。ところで、「つるりとした顔」という表現は、とても面白いものである。

あつたこと

その街が瓦解して途方もないいくつもの

夜をやり過ごし いまこの町に生きている

あの日の凄まじい残響を記憶する

脳裏に描写されるのは 途絶えた情報

くり返される公共広告機構のCM

水をくださいと叫ぶ人々 体育館での無遠

慮な人間摩擦 さんざん耳にした小室サウ

ンズ 現実離れたメロディに違和感をお

ぼえた 街が死んだ 純粹にそう感じてし

まった私は悪か その問いを その真意を

どうかきかせておくれよソクローフ!

松 生 大 輔

余波がいくつもの波紋を描き出した途端

次なる一手がスタンバイしていた

早朝列島激震サブウェイ大パニック

オウム返しに言わせておくれよ

言葉さえも無意味に淘汰されるなら

いったいゼンタイどうしろというのか

果ては海 土底に眠るユーモアを掘り起こ

し この世のバッドニュースをいつそ笑い

飛ばしてやろう 揺れる想いにさよならを

晴れた空には祝福を ぬぐう涙に蓋をせず

少しでもいい 全身使ってさらけ出すんだ

枯れた花に一滴の水 こぼれかけのミルク

に黒い渦 図々しいくらいの相互扶助

希望を想うにはまだ早いかもしれない

そっとしておいておくれよ いい歳した大

人の私が自室にこもって何かを書いている

世界は欲望 浴場には裸の群像 灯たやさ

ず過ぎした幾多の日々よ 檻の中のライオ

ンがでつかいあくびを放ったそのとき

ドアの向こうに 一本の長い道が開かれ

その上を軽やかに歩く 人々がいる

「きょうは何があったの？」

「あったことがあっただけよ」

選評

神尾和寿

「自動記述」という表現方法がある。自意識による自己コントロールを排して、心に浮かんでくることを自由に書き連ねていくものだ。本作品からは、そうした手法が思い起こされた。意欲的な試みである。

いわゆる無意識の内こそ、自分自身のこととして本当に経験してきた事実が、埋まっているのかもしれない。そこでは、あの災厄にはどのような意味があったのか、という問いが、今も響き続けている。

三
席

夏の序章

ドブ川のような小川で

罨に掛かっていた

子猫ほどの 灰色ネズミ

罨の底は水に浸かり

囚われのネズミは目を見開いたまま

ピクリとも動かない

時を奪われた黒い瞳に

ぼんやり映っていたのは

流れにそよぐ アメリカザリガニ

長
坂
寿美子

仰ぐ空をさへぎる

青いバケツを提げた 子供

木立に止まった カラス

ぱしゃっ と跳ねた

アメリカザリガニ

脇腹をつかまれ

白い空を泳ぐ

十本の足

選評

永井 ますみ

ドブ川のような小川でネズミ捕りに掛かって、死んでしまったネズミの視点でまとめられている詩篇。青いバケツを下げた(生きた)子ども。木立に止まった(生きている)カラス。大川で跳ねて、生きていたのに捕まった(死ぬであろう)アメリカザリガニ。どこでもいつでも繰り返される生と死がさりげなく、死の色濃く展示されている。夏こそが死の季節であると言わんばかりに。

神戸芸術文化会議賞

むっちや嫌

岸
本
海
月

むっちや嫌

関西人が東京に住んだら標準語になるの

むっちや嫌

関西人が話す度に怒ってるって思われるの

むっちや嫌

地域によってエスカレーターが逆なん

むっちや嫌

関東で関西弁で話したら通じへんの

むっちや嫌

関東人がエセ関西弁しゃべってるの

むっちや嫌

ぶつかっても謝らへん人

むっちや嫌

むっちや嫌

選評

永井 ますみ

中学生の頃、お兄さんが大阪で働くとかで、教室で関西弁っぽいしゃべりをする奴がいて、私もむっちゃ嫌だったなあ。山陰の田舎より大阪が良いんかい！って思ったのだろうな。中高生くらいになると、「嫌」で終わることが出来なくて、どうしても中庸を取ろう「嫌」でも仲良くしよう……みたいな終わり方をする事が多いけれど、「むっちゃ嫌」な事に引き込まれて、相づちを打っていて、最後まで嫌だったのが心地よかった。

震災関連特別賞

三十年

あの日からずっと空を見上げている

上昇気流にのって

遠く遠く旅立った君

高ぶる感情を抑えもせず

片付ける事も出来ず

飲み込むことも出来ず

涙を流し続け空に毒突いた

一日一日と日常に戻されてしまう

忘れるという人もいれば

忘れないという人もいる

ごとう
ますを

仕方ないと言う人も

どうしてだと言う人も

人の言葉を拾っても埋められるはずもない

共通なのは誰もが同じように

時間が過ぎてゆくこと

何処にいようと何をしよう

三十年経ち僕の時計は動き続け

ちようど君の二倍生きている

しんどいよ

しんどいけれど君に比べれば：

三十年経ったのかという思いと

三十年は一瞬の出来事という思い

誰もが三十年を背負っている

誰かに背中を押されながら

誰かに守られながら

これからを生きる

そして

今日も僕は空を見上げる

今日も僕は御飯を食べる

今日も僕は生きる

選評

永井 ますみ

震災後三十年「ちよと君の二倍生きている」のだから詩人は六十歳。三十歳の時に震災と遭遇したのだろうか。親友が震災か震災関連の事故で亡くなつて、受容する事ができない。いくら空に向かつて毒づいても、年月は容赦しない。誰にでも生きている人には生活がある。日常に流されているようでも、それは誰も同じと認識する事で救われる。詩人は空を見上げることで救われる。そして詩をかくことで更に救われるのだと思う。